

## 教育サポート報告

五十嵐 敏彦、板谷 利久

### 【教育の現場】

栄緑小学校（東区 北 51 東 9） 小学 6 年生 2 クラス

平成 15 年 7 月 11 日 午後 1：30～2：30 総合的な学習の教育実践発表

授業協力：板谷、北原（気象協会）、吉田（フリーライター）

サポート：五十嵐

### 【授業の狙い】

総合的な学習の単元「環境問題に目を向けよう」

栄緑小学校では総合的な学習の始まりに先駆けて昨年春に P T A の協力の下、蔵本校長先生の発案で学校ビオトープを造成した。現在の 6 年生は、昨年からのビオトープに関わり、ビオトープを通じた環境改善の問題に取り組んできた。



写真 1 学校ビオトープの全景

今年も主にビオトープを通じて環境問題に取り組んできたが、自分たちが実践している活動が正しいのか、困惑している問題点の解決策は無いのか、専門家の方に聞いてこれからの活動に活かしていきたいとの背景から、専門化集団

として技術士に白羽の矢が立った。

実は蔵本先生（当日お会いするまで校長先生とは知らなかった・・・）がセンター会員の大熊さんのお知り合いで、大熊さんに振られた話を分科会に持ち込んだもの。ところが、リクエストが気象の話（オゾン層の保全）や鳥が運ぶ種子（ビオトープ植生の多様化）と水生生物（ヤゴの増殖）あたりの話だったので、水生生物を板谷さんをお願いしたほかは、気象や鳥類については教育分科会でコーディネートする形で外部講師に依頼した。



写真 2 専門家チーム（右から板谷さん、北原さん、吉田さん）

#### 【授業の内容】

6年生2クラスの全生徒たちが体育館に集まり、担当した2~3人ずつの小グループに分かれて、それぞれに今までの活動成果を各グループがメモや紙芝居を使って同時進行的に口頭で発表した。その発表に技術士を含む大人（公開授業に参加した他校の教師や父母）が質問や激励をする形で30分、その後、全体集会として質疑の過程で解明できた点や課題として残った点をそれぞれに発表しあった。

我々4人はオゾン層の保全、鳥を増やそう、ヤゴを増やそう、の3つのグループにそれぞれ陣取り(最も多くのテーマがそろっていたのは植物を育てるで、

ここには百合が原公園の所長さんが陣取った、生徒たちの発表に質問や回答を与える形で対応した。

生徒たちは事前に資料をインターネットや書籍などで調べており、知識としてはかなり豊富な情報を得ている感じがしたが、「だから自分たちはどうしよう」という実際の活動にまでは到達していない様子だった。

生徒たちとのやり取りで技術士たちが伝えた言葉に対し、驚いた感想を持った点に以下の何点かが挙げられていた。

ビオトープの昆虫を増やすためアルミの空き缶を土中に埋め、その空間を生息場にしようと計画していた点に対し、アルミは土中で溶け出すからあまり適さないのではと助言したところ、そういうことは全く知らなかった、違う方法に変えようと話が進展した。

鳥と種子の話を知っている生徒に、小さい鳥は木の実よりも草の実のほうをより多く食べている。その草の実は人にとっては雑草と呼ばれるような野草の実だよと教えてあげると、雑草は役に立たないのかと思っていたけれど、むやみに抜いちゃいけないんだねと反応してくれた。

オゾンホールを積極的に素早く埋める方法は今は無くて、せいぜいオゾンホールを大きくさせない手立てが必要。そのためには便利な暮らしを続けていくだけでは出来ないよね。さあ、どうしよう。これは宿題などなど、すべての点が全体集会で取り上げられたわけではないが、一つ一つの小グループでの会話で、生徒たちはさまざまな点に気がついたんじゃないかな、と思いたい。

#### 【感想】

授業の狙いが事前に伝えられていなかったこともあって、我々の伝えたい思いの何分の一ぐらいしか伝えられず、若干消化不良の感が残った。ただ、地物に拘った学校ビオトープに賭ける校長先生の熱い思いに触れることが出来て、「ああ、こういうまともな先生もいるんだ」と感心した教育サポートでした。